

モンスーンアジア諸国における空間言語 (地形名) から見た環境観の地域比較

1. 研究組織

研究代表者：齊木 崇人（神戸芸術工科大学芸術工学部・教授）

研究分担者：井上 民二（京大大学生態研究センター・教授）

遅沢 克也（愛媛大学農学部・助手）

渋谷 鎮明（神戸芸術工科大学芸術工学部・客員研究員）

2. 研究のねらい・目的

本研究は、モンスーンアジアの多様な環境観（自然観・世界観）とその変容の解明と比較を目的として、各々の地域で使用されている諸言語に着目し、その環境観を最も反映している空間言語（地形名）を調査研究の素材とする。空間言語はここではある言語に含まれる地形名・小地名を指しているが、これは使用する民族が経験してきた自然環境と、その自然環境に働きかけた営為（順応、改変、あるいは順応しつつ改変するなど）を反映している。これらの分類と比較研究を通じて、モンスーンアジアの各民族の空間言語（地形名）の特性と環境観の相違点を明らかにし、あわせてモンスーンアジアの共通する環境観を探求し、人類が生き残るための自然と人間の共存哲学を提示することを究極の目的とする。

3. 平成7年度の研究経過

上記の目的を達成するため、室内作業（空間言語の抽出）、現地調査を行うとともに、A01「地域と生態環境」班の合同研究会に参加し、発表・討論を行った。

(1) 研究会

7.15/16 合同研究会（於松山市、萩野班、増田班との合同研究会）

飯島みどり「ニカラグア大西洋岸現地報告」

平成7年度研究計画

10.7/8 合同研究会（於京都市、萩野班、増田班との合同研究会）

古川久雄「中国と東南アジア一地域一生態連関を見る」

小池弘一郎「途上国における勘定型の環境把握」

12.9/10 合同研究会（於つくば市、萩野班、増田班との合同研究会）

渋谷鎮明「東アジアの風水観」・今後の研究方針

2.3/4 合同研究会（於東京都、荻野班、増田班との合同研究会）

鎌野邦樹「生態環境と『自然の権利』について」

齊木崇人・渋谷鎮明「ベトナムの住居・集落の立地と環境観」

最終年度の研究取りまとめについて

異なるフィールドと研究分野を持つメンバーが話題を提供しながら、討議を行った。

渋谷は、専門とする「東アジアの風水観」について朝鮮半島を中心しつつ、台湾・中国・日本の事例をも取り上げて報告を行った。そこでは風水が環境を読みとる上で一つの重要な役割を担い、東アジア諸地域の環境観を包含しつつ、特に場所の選定、住居の配置、墓地の設置などに色濃く生き続けていることを示した。とりわけ、朝鮮半島全域の地形（山・河川）を独特の描写方法で示した『大東輿地図』（図1）には、風水的な論理を用いながら、李朝後期～末期に共有された環境観がよくあらわれていることを示した。この地図では全ての山が半島の付け根にある白頭山から稜線（脈）でつながっており、半島全体を把握する原理が示されるとともに、一方では半島内の各地域も稜線（脈）に囲まれた一つのまとまりを見せており、全体と個の関係が明確に表現されている。ただし風水は、東アジア各地域の環境観を包含しつつも、ある目的性をはっきりと持ち、ある一定の視点で各地域を読むとする、特殊な環境観であると考えられ、本研究で追求すべき環境観とはある部分で異なっていると思われる。

さらに合同研究会において「ベトナムの住居・集落の立地と環境観」として、齊木・渋谷がベトナムで行った予備的現地調査について報告し、ベトナム北部の紅河流域の農村におけるキン（ヴェト）族、フモン（黒・花）族、ヌン族の住居と集落をめぐって、その特性と、住居・集落の立地場所の選定や住居の空間構成が民族によって異なっていることについて論じた。

（2）空間言語の抽出

本研究では、モンsoonアジアの環境観にアプローチする一つの試みとして、各言語の辞書から地形に関する名称を抽出し分析するという方法をとっているが、本年度はこれまで行ってきた朝鮮語、台湾語の空間言語（地形名）の抽出と分析に引き続いて、東南アジアの各言語について検討を行った。まず東南アジアにおいて比較的広く用いられ、作業に必要な辞書（日本語との辞典・国語辞典）が刊行されているベトナム語、タイ語、ビルマ語、インドネシア（マレー）語などの中より、辞書の刊行状況を調べるとともに、適切な辞書を選定した。そしてベトナム語、インドネシア語について空間言語（地形名）の抽出を開始しているが、現在のところまだ終了していない。



图1 大東奥地図

また同時に上記の方法について吟味し、分析を行う研究者自らが当該地域の空間・地形のイメージを持つこと、そして上記の結果を現地の実地の地形認識とつきあわせる必要性を感じ、室内作業と合わせて予備的な現地調査を行うこととなった。

(3) 現地調査

上記のような経過から、本年度はベトナムとインドネシアで、予備的な調査を行った。

平成7年12月には、齊木・渋谷がベトナム北部の紅河流域のハノイ周辺から、ビンフー、イエンバイ、ラオカイ省までの農村地域において集落の立地、住居の空間構成、および地形の利用など居住環境に関する予備的な調査を行った。その結果、キン(ヴェト)族、黒フモン(メオ)族、花フモン(メオ)族、ヌン族の住居と集落立地に関して次のような点が確認できた(写真1, 2, 3, 4)。

今回観察できた範囲内では、各民族の集落・住居はその立地位置が異なっており、ラオカイ省などにおいてはフモン族は尾根に近い斜面の中腹やテラスを居住地として利用し、それに対しキン族やヌン族は谷底の平地を利用しており、現在のところ垂直的な住み分けがなされている。このように集落・住居の場所選定の基準に相異が存在しているように思われる。ただし、地域や地形によって基準は異なっている。またこの調査を通して、実際により細かい、住民の場所利用・認識をもとに環境観を探る必要性が確認された。

ついで平成8年3月には、齊木、遅沢、渋谷が、遅沢のフィールドであるインドネシア・スラウェシ島中部のブギス人の居住地域のマランケ・ペンカジョアン村(写真5, 6)、およびトラジャ人の居住地域であるタナ・トラジャにおいて予備的な調査を行った。その結果、とくにペンカジョアン村においては、土地利用の目的によって場所を選ぶ方法が確認できた。たとえば住居の建設に適した場所として「高いところを前に、低い場所を背後にして住宅を建てるのがよい」とされている。この地域は海に近い低平な地形の場所であり、地形的に高い場所を把握し、そこを道などの公共の空間とし、背後を排水のための空間とするような認識が推測される。

また、ペンカジョアン村の人々の周辺環境の空間認識では、大きく森と海とを結ぶ空間軸(自然軸)があり、例えば森(HUTAN)にはMASUK(入る)とKELUAR(外へ出る)とし、海(LAUT)にはPERGI(行く)とNAIK(登る)と表現している。さらに、Palopoと隣り村Tompeとの関係ではATAS(上る)とBAWAH(下る)の社会軸が強く意識され、加えて、その領域の切れ目はSUNGAI(川)とJEMBATAN(橋)により認識されていることが確認された(図2.3)。

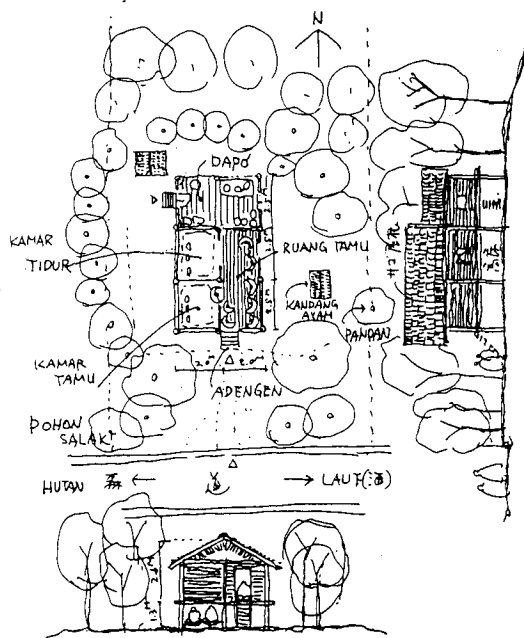


図2 サゴヤシの家 (NURDIN · RUBESIA)

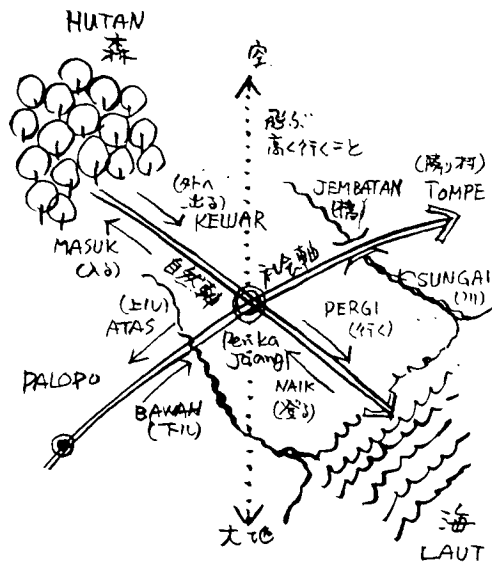


図3 Penkajoang の空間観モデル



写真1 ベトナムフモン族の集落

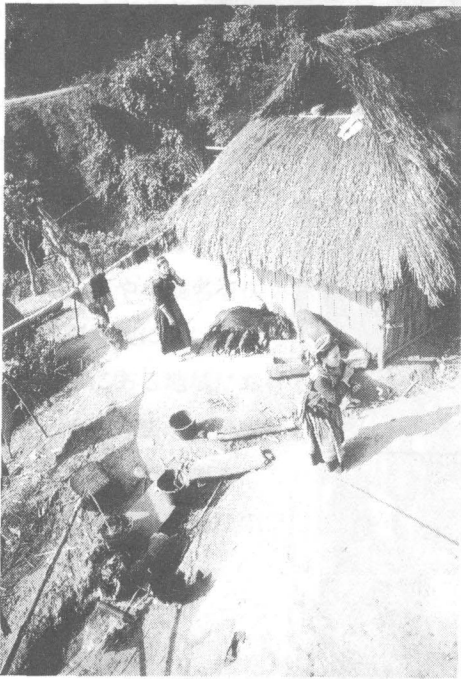


写真2 ベトナム花フモン集落

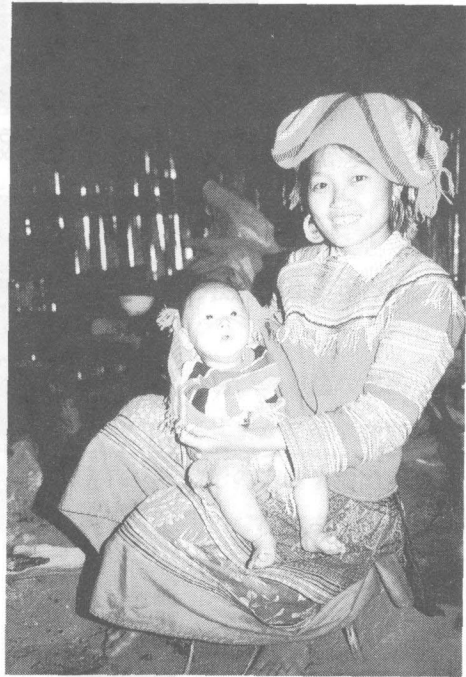


写真3 ベトナム花フモンの親子



写真4 スラウェシ・サゴ調査



写真5 スラウェン・サゴ



写真6 ブギス型高床民家

この2回にわたる現地調査を通して、環境観を把握する方法として、辞書などによる空間言語の抽出以外に、対象とする地域の現地調査を通して、その地域で用いられる空間言語（小地名）を採集・分析し、さらには場所を選ぶ方法や、その背景となる空間観を抽出する必要性があることが明らかになった。

4. 研究の成果とフロンティア

本年度の研究を通して、本研究の目的である空間言語を用いた環境観へのアプローチについて、以下のような知見が得られた。

本研究では環境観とは、ある地域の人々に①共有化され、②引き継がれる価値や空間観であると考えている。そしてそれは住居・耕地などの場所の選定がなされるための根拠となり、さらにそれを引き継ぐという機能を持っている。そのような環境観にアプローチするため、本研究では空間言語、とくに辞書などで抽出可能な地形名に着目してきた。

しかし、より生活に密着した、例えばある村落などでの場所選定は上記のような地形名のみを用いるのみでは捉えることができない。むしろ、日本における字名のような「小地名」、あるいはそれよりも多少広く使われる地形の「方名」などを拠り所にして行く方法が考えられるべきであろう。また空間言語のみならず、環境観の背後にある上一下、ウチーソトというような空間に対する意識をも取り上げて行く必要性を感得するに至った。

ベトナムの調査などからは、民族ごとの住み分けと場所選びが行われていることが確認できたが、地形名や小地名を採集することで同一の地域における複数の民族の場所選びや、その根拠となる環境観について明らかにすることが可能であろう。

このようにある地域における地形などの環境への価値づけ、場所選びの方法などについては、アプローチの方法には辞書などによる地形名の抽出・分類によって大まかに環境観について分析を行った後、現地調査により現地のある一定の地域の小地名・地形の方名を抽出するという順序を踏むことが有効なのではないかとも考えられた。両者は補完的な役割を持つことが期待される。

5. 今後の課題

次年度は継続してネイティブスピーカーの協力を得てベトナム語、インドネシア語の空間言語の抽出と分類を進めるとともに、予備的調査を行ったベトナム北部、インドネシア・スラウ

ェシ島において小地名の抽出による環境観の把握を目的とした本調査を行う予定である。また一方で、タイ、ミャンマーなどの言語についても検討を行い研究のまとめを行う。

6. メンバーの研究業績（平成7年度発表分）

齊木崇人

「台湾・台中地域の農村集落・居住空間の秩序－東アジアの集落・居住空間研究7～12－」（共著）

『日本建築学会大会学術講演梗概集』 E-2, 1995.

「東アジアの国々に脈打つ風水の空間秩序形成技術」吉武泰水編『円相の芸術工学』工作舎,

pp. 147-168, 1995.

「自然知の住まい」『すまいろん』37号, 住宅総合研究財団, 1996.

渋谷鏡明

「台湾・台中地域の農村集落・居住空間の秩序－東アジアの集落・居住空間研究7～12－」（共著）

『日本建築学会大会学術講演梗概集』 E-2, 1995.

「朝鮮半島における風水地理説を用いた地形認識」『歴史地理学』37(3): 1-15, 1995.